

名は、stage 6 の時に起立台を使用したのもっと早い時期から装着していれば良かったと思われる。起立台使用が可能であった期間は1名が8ヶ月、他の1名が5ヶ月であった。次に起立台装着状態で矢状面より全員を観察してみると stage の高いもの程耳重よりおろした垂線は股、膝、足関節の後方を通るようになる。又 stage が進行するにつれてこの傾向が強くなっていく。このためアライメントがみだれてきて stage 6 のものでは大腿カフによりかかりすわったような姿勢をとり、その部に疼痛を訴えるようになった。以上のようにスタビライザー型起立台を試用した結果次のようなことがわかった。

1. 全例が装着した状態では脊柱の前弯や側弯が改善された。
2. Stage 6 でも起立台使用により起立可能であったが、その期間は8ヶ月と5ヶ月であった。不能となった原因はROMの制限によるところが大きいと思われるので今後の起立時間や1日の回数を検討しなければならない。(現在1日1回で約20分間)。
3. Stage の進行と共に矢状面でのアライメントが乱れるので、今後できるだけ正常アライメントに近づけるようにし、又 Stage 6 以降でも起立可能の方向にもっていくよう検討しなければならない。

4. 筋ジストロフィー側弯の自然経過と発生要因について とくに心理的面からの検討

徳島大学

松 家 豊

徳島療養所

早 田 正 則

進行する身体的障害のうちで側弯は心肺機能、ADL、介護などに及ぼす影響が大である。更に希望のない本症の予後はパーソナリティの形成、精神的発達にも影響を及ぼす。今回、PMD側弯の予防的見地から側弯の進行と心理的な面での関連性があるかどうかを知る目的で側弯の経時的変化と心理的検査所見の変化について検討を加えた。

側弯は過去10年間にわたり定期的にX線によって追跡した。進行例と非進行例に区分した。心理学的検査は矢田部、ギルフォード性格検査(Y-G)を昭和45年9月、49年9月、53年1月に実施した。Y-G性格プロフィールのうち向性の点を取りあげた。側弯進行例ではその進行前と進行過程において比較した。非進行例では進行例とほぼ同年代のものを対象とした。

[結 果]

1. Y-G 性格検査のプロフィール型の分布は他施設と同様の傾向を示した。(表1)

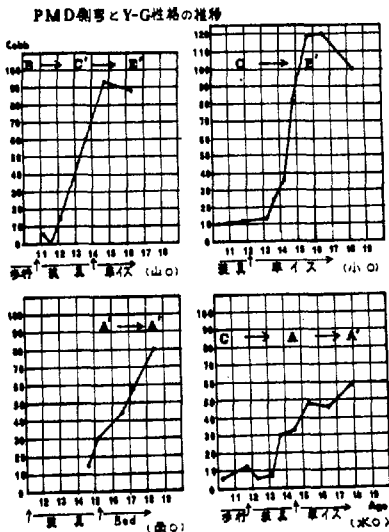
表1

Y-G 性格型						
Y-G	E	C	A	B	D	
8~14才	10 27.0	16 43.2	8 21.6	1 2.7	2 5.4%	37
15~19才	14 36.8	12 31.6	4 10.5	7 18.4	1 2.6	38
20才~	6 37.5	2 12.5	2 12.5	5 31.3	1 6.3	16
	30	30	14	13	4	91
香島	33.0	33.0	15.4	14.3	4.4%	
福多賀	37.5	22.9	22.9	14.6	2.1 (白濁)	
神 戸	36.9	20.0	30.8	9.2	3.1 (河野)	
塩 原	22.1	13.0	36.4	6.5	22.1 (白濁)	
備 考	15.7	15.5	40.5	15.2	13.1	

一般的傾向として消極的内向的な性格に偏している。
 年齢が高くなるにつれて外向積極型をとるものが出
 現してきている。

2. 全体からながめて側弯の進行例および非進行例とY-Gプロフィール型との間には明確な関
 連性が見出せなかった。しかし、D型は側弯進行例では1例もみられなかった(図1)。

3. 症例毎に検討してみると、側弯の進行は12~13才にはじまるが、丁度その年代は歩行不能と
 図2



図

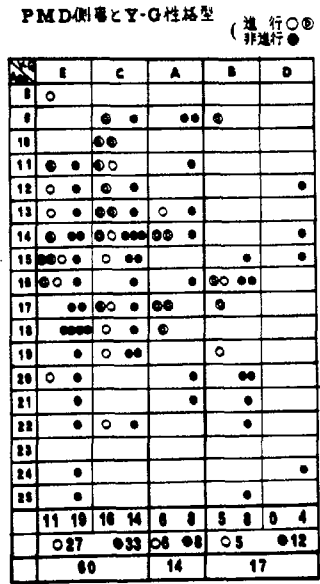
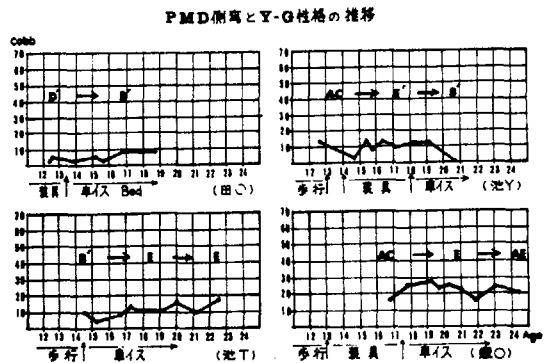


図3



なり装具歩行も困難性を増し行動の制約をつよくうける時期に相当する。しかも側弯の進行は加速度的である。Y-Gプロフィール型はC→E、B→C→E、Aのまま、Aに移行するものなどまちまちであった。(図2)

側弯非進行例でもE→B、B→E、C、Eのままといった種々の様相がみられ一様の傾向が見出せなかった。(図3)、障害度とY-Gプロフィール型との間にも関連性がつかめなかった。この事実に関してはすでに歩行不能という心理的適応を経て良い防衛機制が生れたこと、日常の積極的活動(自治会、生徒会、サークル活動、遊び)による支え、学習、教育による知的防衛機制の発展などの関与が考えられる。

今回、側弯という身体的条件とY-Gプロフィール型とを検索した結果、側弯という尺度をもって性格の変化をみることの困難な手段であることが知らされた。しかし、習慣的姿勢や側弯と心理的な問題については無関係とは考えられないので今後更に追求してみたい。

5、PMD患者(児)の脊柱変形、その発生原因の究明及び予防対策

国立療養所刀根山病院

奥田 勲 膳 棟 造

〔目的〕

PMD病棟入院患者、児の脊柱変形の現実はいく。脊柱変形パターン分類のこころみ。及び各パターンにある人達の脊柱変形の経時的変化とその要因の究明。

〔対象と方法〕

47名(全員男性、1名W・H病以外はPMD-1名F S Hタイプ以外 Duchenne タイプ)。全脊柱2方向X線撮影を坐位でおこない、そのフィルムをもとに、

- (1) Cobb 法にて lateral angulation (L・A)
- (2) Wilkins らの Kyphotic index (K・I)
- (3) Nash, Moe による Rotation (Rot)
- (4) Pelvic Obliquity (P・O) を測定する。

〔結果〕

平均年齢は13.8才(8~23)で、4名がその後死亡している。-1名は急性胃穿孔、他は呼吸

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

進行する身体的障害のうちで側弯は心肺機能、ADL、介護などに及ぼす影響が大である。更に希望のない本症の予後はパーソナリティの形成、精神的発達にも影響を及ぼす。今回、PMD 側弯の予防的見地から側弯の進行と心理的な面での関連性があるかどうかを知る自的で側弯の経時的変化と心理的検査所見の変化について検討を加えた。